# 現代版プロレスのフレーム分析
# A Frame Analysis of Contemporary Japanese Professional Wrestling

1K06B244　　吉見　淳司
指導教員　主査　リー・トンプソン先生　　副査 中村千秋先生

本論文は社会学者リー・オースティン・トンプソン氏が発表した「プロレスのフレーム分析」を基に、２００９年現在の日本におけるプロレスを考察するものである。力道山時代のプロレスを対象としたトンプソン氏の論文と比べると、現代のプロレスは多様な変化を見せている。そのため、先の「プロレスのフレーム分析」と今日の状況を照らし合わせるといくつかの齟齬が現れる。その食い違いを解明し、なぜそのような変化が起きたのか、そして、現在のプロレスを同じ手法で分析すればどうなるのかを明らかにする。

１章ではトンプソン氏が発表した「プロレスのフレーム分析」を紹介。フレーム分析とはどのようなものなのかと言う理解を深め、それがプロレスに応用された場合のトンプソン氏の考えを紹介する。また、これまでにあった反応の中でも否定的な三者の例を取り上げ、どのような点で納得ができていないのかを探り、問題点を明確にする。

２章では実際に、現在のプロレスで生じているさまざまな変化を見ていく。１節では第二次世界大戦直後の状況で、プロレスを支える原動力だった「外国人に立ち向かう日本人」と言う構図の弱まりを、これまで新日本プロレスで行われた王座戦を基に検証していく。２節では、その様なコンプレックスを持たなかったアメリカでは、すでにプロレス≠真剣勝負というカミングアウトが行われていることを説明。第３節では日本国内におけるプロレスが真剣勝負でないと考えられている事例を考える。実際の興行においての試合内容や、ファンたちへのアンケートの結果に見られる意識の変化を探る。

３章では前章で紹介した変化がなぜ起こったのかを考察する。１節ではプロレス団体の業績悪化とともに台頭してきた格闘技イベントという事実から、とりわけプロレスに真剣勝負を求めていたファンが格闘技イベントに流出した背景を見る。２節ではプロレス中継がゴールデンタイムから撤退したことによるファン層の変化を考察する。テレビ中継が深夜枠に変更になったことにより、プロレスファンが若者中心へとシフト。それに伴い、ファンが求めるプロレスも変容していったと考える。それらの傾向を踏まえ、３節で、プロレスの変容を説明。プロレス＝ショーへの認識の変化を結論付ける。

４章ではこれまでの考察をまとめ、筆者の「プロレスのフレーム分析」を完成させる。１節ではフレーム分析における重大な要素である参加者を定義。力道山時代とは参加者そのものが変化していると指摘する。２節ではトンプソン氏の結論であった「八百長」の存在を疑い、プロレスにおける八百長の成立に疑問を呈す。３章では現在のファンがどのようにプロレスを楽しんでいるのか、そして、その観方がフレーム分析ではどのように変化するものなのかを考える。第４節で現代プロレスを考察したフレーム分析を展開。現代版プロレスのフレーム分析を完成

させ、これからの日本のプロレスの変化を予想
していく。